

---

# 3 カウント～辺りに轟け左腕（サウスポー）～

熊取

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

3カウント（サウスポ）に轟け左腕（ス）

### 【Nコード】

N7379E

### 【作者名】

熊取

### 【あらすじ】

3カウント第二部。廃部の問題がなくなった野球部は夏の甲子園予選大会を勝ち進むために突っ走る。

## 第一話：顧問登場

5月、日の入りが遅くなり日の出が早くなって来たとはいえどもまだ肌寒い今日この頃その朝も早くにグラウンドにはちらほらとユニフォームに身を包んだ球児達がいた。

キィィン！！

この学校は校長の趣味の農園が周りにある為近辺への騒音問題の心配は出ずに済むのでバットの音も問題はなく響き渡っていく。

「お前何考えてるんだよ。こんな打球打って時間がないんだからふざけるなよな。」

音には問題なかったが、ボールが三塁ベースの上を越えフェンスに当たったことは少し問題が残る。

「何だと。てめえもサードだったら飛びついてでも取ってやる気はねえのかよ。」

「ノックも出来ない下手糞が人の性にしようとしてんじゃねえぞ。」  
「何だと。」

「ちょっと2人とも・・・。」

この会話をしているのは最近ますます中の悪くなっている正捕手で今ノッカーをしていた2年生の羽村と三塁手で同じく2年生の田崎であり、今この二人をなだめようとショートから口を挟んで巻き込まれた少年がいてその子は一年の竹橋で50メートルを5秒すれす

れのタイムで走れる俊足の持ち主である。

「いつも最後は竹橋君が巻き込まれて、かわいそうに。」

「竹橋ドンマイだな。」

「ちよっ、先輩も間野君も外野で落ち着いててもいいんですか？」

上から順に三年の戸塚に一年の間野、そして試合から数日後に入った新入部員の福地でまだあまり二人の喧嘩は見慣れていない事があって毎回心配になっているのだ。福地は何かの部活には入りたかったらしく軟式の小学野球の経験がある程度でまだボールがとれる程度である。

「大丈夫だよ。2人共限度は知ってるから。」

「そうそう、それに……光が帰って来たからもう大丈夫だろ。」

朝のロードワークに出かけていたこの野球部のエースピッチャーの森下 光が戻ってきた。

「明後日は練習試合なんですからいちやついてないで練習して下さいよ。このままじゃ相手チームの練習になりませんよ。」

「てめえはこのチームが弱いみたいと言ってんじゃねえぞ。」

「何言ってるんだよ。俺等一回戦ボーイじゃん。」

羽村は反論しようとするが、田崎は呆れた表情でやれやれと呟いた。そしてまた喧嘩し始める。

「ど、どうしようか森下君。」

マネージャーの永谷がやってきた。

「はぁ、仕方がないな。……サード!!」

喧嘩中の二人の間をボールが駆け抜ける。

加減はしてあるが当たったら少しまずい具合の球足である。

「お前あぶねえだろ!!」

「当たったらどおすんだ。」

「レフトナイスカバー、先輩もう一丁。」

今度はちゃんと捕球した。

「ナイスキャッチ、田崎先輩は良いですねえ。羽村先輩はどうですか?」

こんな言い方をされて黙っていられる人ではないので「何でも来いや!!」竹橋のグラブの中を叩いて待っている。

「じゃあ外野の中継プレイ見せて下さい。外野行きますよ!!」  
それからはまともな練習だった。

この高校にはこの他にキャプテンの白岡、小柄で人懐っこい二塁手の瀬谷、細見の長身で人見知りのある一塁手の相川がいて三人は基礎練習中である。

そして、朝のホームルーム前の20分まで二時間近く練習して朝は終わった。

野球部の皆は朝も早くから起きたので授業は大変であった。

放課後はグラウンドもまともなスペースをくれないのでキャッチボールをしてフェンスを使ったペアノック、バント、ティー打ち、素振り等の練習をする。

この日は練習後に中々来ない監督がやってきた。

「おーおー、精が出るねえ。他の部の先生も熱心だって褒めてたよ。」

顧問は野球を見るのは好きだが、知識はないという佐々木というおっさんの気がある女の先生だ。

「誰のせいでこんなことになったのか分かってるんですか？」  
田崎が呆れ気味な感じで言った。

「勝手に練習試合組んだのは誤っただろう。それに昔の同僚と酔った席ならよくある話だよ。」  
どんな話しだよ、と皆が心の中で突っ込みをいれる。

「それに野球なんて試合してなんぼでしょう。」  
悪いと思って無いのがひしひしと伝わってくる陽気な先生だ。

「普通の相手なら良いんだよ。俺らみたいなどこだそこ？みたいなレベルの学校なら。なんで毎年ベスト8位まで進むところの試合を持ってくるんですか？」

田崎は皆の代弁者になって話している。

「酔ってたら持ってくるんだよ。それにこの前は勝ったらしいじゃ

ん。何で試合があるって教えてくんなかったんだよ。」

「あの時は相手が弱かったから勝てたんですよ。それにアイツが居なかったらまず負けてましたし。」

「ん、あいつってどいつ。」

福地を見てお前か！、と指を刺す。

「違うって、あいつならもう帰ったからいないですよ。」

「そうなん……じゃ、頑張ってるね。明後日の試合には来るから。」  
ふらふらと現れた先生はふらふらと姿を消した。

そして、皆はダウンと柔軟をやって解散した。

## 第一話：顧問登場（後書き）

遂に始まりました。第二部です。

皆さんに楽しんで読んでいただけたらと思います。



## 第二話：球友

練習試合当日、対戦相手校のグラウンドに直接集合となり、同学年の者は同じ方面ではいなかったなので、森下は一人で行った。

「おはようございます。」

「おはよう。」

彼が待ち合わせ場所に着くと三年の二人がいて、グラウンドに一礼した後で挨拶を掛けた。

グラウンドは校舎に隣接して設けられて両翼は70m程である。

比べるのもあれだが、うちより随分広いな。それに、部費の差も多分大分あるな。

端に置かれてある機材を見てそんなことを思った。

相手チームの人は流石に結構な数がもう来ていてアップをしているが、顧問の人の姿は見えない。

「……あれ？」

森下が軽く相手の部員を見ているとそこに見知った顔が見えた。

そのまま少し前に出て見続けていると相手も気が付いた様で近くの人に声を掛けてから、互いに寄って行った。

「よっ、久しぶりだな桐山。」

「ああ、久しぶりって光!!! お前何で? 野球やらないって言ってな

かったか？しかも、何で？」

桐山は身長181の少し長身でスラットした体にがっちりした肩周りであり、中学の時のチームメイトだった。

「何で？って言われてもなー。……ははっ、もしかしてお前は俺がやらないと本当に思ったのか？だって俺だぞ。」

実際は本当に止めていてなりゆきの延長線上なのだが、それは言わない。

「お前、何でそれならそれで連絡の一つも寄越さないんだよー。」  
「悪いな。」

一、二週の話しだったのでそこまで気が回らなかった。と言う事もなく気にはしていたが、直前になると妙に気恥しくなってくるのだ。始めたきっかけ等も聞かれたくないとも思っていた。

「全く。ん、じゃあ今日はお前の所とやんのか？」

「試合も無しに朝っぱらからユニフォーム着て野球場になんかこねえよ。」

「ははっ、そうか。これじゃあ鷹の言ってた通りだな。」

数か月前の渚中学での会話である。

「「は？何て？」」

森下が仲の良かった球友を集めて高校では野球をしないという事を告げると三人が反射的にそう答えた。

「だから、俺は高校ではやらない。高校は一番家から近い三越にする。」

「何だよ!! お前なら推薦の一つ二つ来ただろ。」

普段は温厚な奴だったが、少し声を荒げて言った。

「……野球意外にもやらなきゃならんことが出来たんだよ。」

「あ、……そうか。お前ん家、今大変だもんな。」

皆直ぐに察して目を落とした。

「へへっ、そゆこと。」

野球以外でも真剣な表情を作る見慣れない姿の友を見るのは、少し可笑しい気持ちにさせる。

そして、森下はパンッと手を叩いて鞆を持って立ち上がり、またなと言って帰って行った。

暫くして口を開き始めた。

「俺、あいつと戦ってみたかったんだけどなー。」

「そしたら昔は同じチームでプレイしてたんですってテレビで紹介されたりしてな。」

「あ、俺もそれ考えたことあるよ。」

「高校……か。」

三人は顔を合わせると顔をそらして、それぞれのタイミングで溜息を吐いた。

ガタッ、

今まで会話に参加していなかった鷹が教室を出ようとする去り際に言った。

「あいつを誰だと思ってんだよ。その内嫌でも又グラウンドで会えるよ。」

三人にもなんだかそう思えて数分後にはいつもの皆になっていた。

「へー、あいつがそんなこと言うとはねえ。意外だな。」  
口数が少なくクールな彼だったので意外に思えた。

「でも、おかしいな。今日の相手は大した事ないから1年も入れて2年主体でいくって話しだったけど、お前がいるのに何であのオッサンそんなメンバーにしたんだ？お前がいるから受けたんじゃないの？」

彼は知らないらしい。この試合が酔った勢いに任せた物だということをと。

だが、相手校の監督も加減を知っているようで森下は少しほっとした。

いくら自分でも一回り目は兎も角、毎日夜遅くまでみっちりと練習をこなしている高校相手にまともに9回を抑えきる自信は流石になかったのだ。

「ただ単に知らなかっただけだろ。で、そんな組み方ならお前も出れるんだろ、高校初戦か？」

「そう、6番ライトだよ。それにしても初戦がお前とはな。あ、もう二人でアップしとこうぜ。」

「そうだな、後で怒られそうだけど……。」

二人はランニングを始めた。

三越高校のメンバーも全員揃った。

「ねえ、何で森下君は相手チームの子と先にアップしてるの？」  
マネさんが誰とも無しに訊ねた。

「ふふふっ、それはな。俺があいつに相手選手を探る命を出したからなのさ。」

「昔のチームメイトらしいよ。」

田崎は軽く流されるどころか相手にもされずに少しいじけた。

「まあ、積る話もあるんだろうから、僕たちも始めよう。」  
そして、三越の選手も体を作り始めた。

試合前の円陣を組んでいる所だ。

「てめえらー、相手はどうやら三年抜きっつー舐めた事しくさってる奴らしいが、そんなところは軽く捻るぞおらー!!」

周りに疎らにいる観戦客から笑い声がしてきて羽村以外の者は気恥しくなった。

でも、便乗して置きましょうか。

「はい!! やってやりましょう。」

「おし、気合い入れていくぞー!!」

『おう!!』

そして、彼等にとって後々結構重要となる試合が始まった。

《試合オーダー》

三越高校

1番 遊 竹橋 右投右打

2番 二 瀬谷 右投右打

3番 投 森下 左投左打

4番 捕 羽村 右投右打

5番 中 白岡 右投右打

6番 一 相川 右投左打

7番 三 田崎 右投右打

8番 左 戸塚 左投左打

9番 右 間野 右投右打

御陵高校

1番 中 志波 右投左打

|    |   |    |      |
|----|---|----|------|
| 2番 | 三 | 藤下 | 右投左打 |
| 3番 | 二 | 宮山 | 右投右打 |
| 4番 | 一 | 丹後 | 左投左打 |
| 5番 | 捕 | 中津 | 右投左打 |
| 6番 | 右 | 桐山 | 右投右打 |
| 7番 | 左 | 橋田 | 右投右打 |
| 8番 | 投 | 林山 | 右投右打 |
| 9番 | 遊 | 三國 | 右投右打 |
| 先行 |   | 後攻 |      |
| 三越 | × | 御陵 |      |

## 第二話：球友（後書き）

すっかり夏が過ぎてしまい、待っていた者がいましたら誠に申し訳ございませんでした。

ちょっと軽く忘れてしまっていました。言い訳5割ですけどね。

次回ようやく二戦だ。やっぱり試合書くほうがこちらも楽しかったりするんですよ。

では、又。



### 第三話：先制点

「皆、ちよつと集まって。」

ブレイの宣言を受けて戻ってきた面々に佐々木先生が声を掛けた。皆は直ぐに円陣になる。

「あーつと、まあ、一言。…楽しんでやろうね。」

光と羽村が首を傾げるが、体をびくつと反応させるものも幾人かいた。

「何か見てて気の毒なくらい固いからさあ、もっと落ち着いていこう。」

この人監督なんだ、と皆が実感した。

パン！！

光が手を叩き、大きな音を出した。やっぱり緊張はそう簡単に解けるものでもなく以上な反応を見せた。

「こりゃ、駄目かも。」

光は苦笑いだが、先生は受けたらしく笑い声を洩らしている。

「よしっ、バッター行ってこい！！」

竹橋が先生に叩かれて向かって行った。

相手投手は170cm程の小柄なサイドっぽいスリークォーターの選手で130そこそこの球をほおっており、セットポジションから投げるタイプの様だ。

ふうー、落ち着け、落ち着け。大丈夫幾等相手が強くても流石にバットに当たらない事はないだろ。うっわーでも緊張するー。もう三振しないようにだけしよう。

『一番 ショート 竹橋君』

向こうのマネージャーがアナウンスを担当している。

そしてバッターボックスに入った竹橋だったが、本人は真剣な表情を作っているつもりなのだが、気の毒にも近くにいるキャッチャーと審判には強張っているようにしか見えなかった。

相手チームの一番妙に肩に力入ってるなー。今日は完封できそうだぜ。サインは、とインにストレートか。

ピッチャーはセットから軽い気持ちで投げた。

パウン、

高めに外れていたが思わず手が出てワンストライクを取られた。

「ははっ、この分だともうストライク投げてくれないな。」  
光が呟いた。

「どうしてだ？」

偶然後ろにいた間野が気になって声を掛けた。

「ボール球を振ってくれるって事。だって普通あれだけゾーンから

高かったら振らないって。見極めが出来てないんだよ。次はワンバウンドのカーブでも空ぶるぜ。」

光の言ったとおりに見事に空振りした。

「アウトコースのストレートで三球三振ってな。」

光と間野は悪いと思いつつも三振を期待していたのだが、竹橋はアウトコースのボール球にバットを当ててピッチャーゴロだった。

次の瀬谷も竹橋程では無いが、どこことなくギクシャクとしながら打席に入り初球からインコース低めの難しい球に手を出して呆気なくサイドゴロに倒れた。

『三番 ピッチャー 森下君』

いいなあ、四球で二アウトなんて楽すぎるだろ。

カットで玉数稼ぐとか出来たらいいけど、生憎俺にそんなスキルないからな。

取り合えず、三人で終わらないようにしよう。

「お願いしやーす。」

頭を下げた打席に入る。

この時点で相手バッテリーはこのチームを舐めきっていた。

なので、ピッチャーはキャッチャーが外のボールゾーンに構えると嫌そうな顔をした。なので、キャッチャーは仕方なく少し内によってストライクに構えた。

まったく、中津は心配症なんだよ。こんな奴ら真っ直ぐだけでも対

して打てやしねーよ。

一球目、少し甘くなって真ん中低めに入った球を光は真後ろのファールにした。

勿体ねー。しくじった。一球目絶対甘い所来ると思ったのにー。流石8校のピッチャーだ。球が重い。

…切り替えよ。次は、……変化球にしよう。それ以外ならいいや、ワンストだし。

第二球目を投げた。予想通りのカーブだったが、内に外れてワンワン。

こいつ立ち上がり悪いタイプだな。ボール先行はしないからストレートだ。今の球がこっちのボールだったから。今度は向こうに来ることを願おう。

…良しきたー!!

三球目はドンピシャの外角のストレートで光はうまく流してサードの頭を越し、レフト線ぎりぎりのフェアになり楽々な二塁打だった。

「二アウトランナー二塁!」「ナイバッター。」「バッチここで一本。」

暗めだったベンチが少し明るくなった。

今までぼーっとスコアを付けていた永谷も思わず顔を綻ばせて皆と拍手を送った。

「おっしゃー!!」

バッターは気合十分だ。

くっそー、ミスったな。少し甘かったか？

確かにそれもあるが一番はやはり油断であるが、三國は点を取られるまでは分かりそうにない。

そして、一球目二球目とポンポンと真っ直ぐでストライクを取って追い込んだ。

やっぱりこんなもんか、と思うには十分な手応えのなさだ。

三球目も簡単にストライクを取りに行ったカーブを強振された。

打球はぐんぐんと伸びて、左中間のフェンス手前の所でバウンドを付いた。

外野は前進していたので三塁打となった。

「「ナイバッチャー!!」」

ベンチからは先ほどよりも大きな声が出た。

「ナイラン。」

光は待っていたキャプテンの手をニコツと笑って叩いて戻っていつ

た。

ベンチに戻ると皆ナイス、ナイスと言いながら彼の凄さを改めて感じた。

「流石、期待の新人君だねー。」

「あざッス。」

先生ともハイタッチを交わしてキャッチボールに行った。

「お前、打たれたじゃんかよ。」

マウンドにキャッチャーが寄ってきて言った。

「……分かった、リード通りに投げるわ。」

グラブをひらひらとさせて帰れ、と伝える。

個人的には腹がたつがキャッチャーとしてはピッチャー向きの性格だな、と思ったりしていた。

次の白岡は冷静になった三國にショートフライに抑えられた。

このマウンド良いな。流石野球場ってか。

観客はこの前より随分少ないな。ん、あつ、何で声掛けないかなー

あいつは。見にきたなら言ったらいいのに。試合後にしよう。

先輩も準備できたみたいだな。

『一番 センター 志波君』

相手バッターは背が低い上にやや屈み気味のかまえをしている。

こういうのは誰でもだと思うけど投げにくいんだよね。それで一球目は？……よし。

ピッチャーはゆっくりとワインドアップをして一球目を投げる。

スパンツ、

インハイ一杯に決まりバッターは少し腰を引いて見逃した。

そして、同じフォームではあるが足の位置を横にずらしてしまった。逃げ腰では中々打てないもので次の外角に入ってきた低めに外れているカーブに手を出してしまいセカンドゴロであっさりとワンナウト。

その次のバッターは初球をセーフティバントしてマウンドと三塁の間の方に転がっていったが、光のフィールドディングの前に余裕のアウト。

乗ってきた光はテンポよく投げて、五球目の彼の決め球のストリートとほぼ同じ速さで曲がるスライダーで三振に取った。



### 第三話：先制点（後書き）

何だか羽村視点が書けない。否、……書きたくない。

嫌いとかではないのだが、……考えてそんなことを想像したくないみたい。

皆さんが何も言わなければ今後とも彼の視点はなしで行こうみたいです。

では、又。

#### 第四話：善戦（前書き）

今話から書き方を変えました。  
前の3話もいづれこの方式に直します。  
永らく失礼しました。

## 第四話…善戦

『2回表三越高校の攻撃　6番ファースト相川君』

「お願い、します」

蚊の鳴く様な声で言い頭を下げた。

（随分と覇気がないな。緊張してるのか…。線細いと言うかひよろひよろだな。インの球振れるか…）

そんなことを考えながらキャッチャーはサインを出し、一球目を投げた。

少し真ん中にボールは寄ったがそれでも遅いタイミングで空ぶった。三國はテンポよく投げるタイプなのでキャッチャーは直ぐにサインを出し、ピッチャーも直ぐに投げる。

二球目はインローに構えた所ピッチャーに収まる大きなカーブで二ストライク

次にキャッチャーはアウトコースに構えた。だが、ボールはインハインに大きくずれて何とか捕球してバッターは空振り三振に終わった。

ピッチャーが苦笑いしていた。

『7番サード田崎君』

「オッシャーッス！」

（元気だな。さっきのバッター見た後じゃ余計に元気に見えるぞ）

田崎は声は良いが、一球目の土につく程の変化球を緊張からか空振りした。

（ストライクだけ、ストライクだけ）

次の球に頭に念じを掛けながらバッターボックスに立ったが彼は元々見極めが苦手な打者ではっきりと外れる球でないと思わず振ってしまうのだ。

そして次のアウトコースへのボールを当ててしまいピッチャー前のゴロでアウトになった。

次の戸塚は真っ直ぐ三つで2－1となりボール球ギリギリに入ってくるカーブで見送り三振にされた。

（三者凡退か：ま、いいか。次は4番から、4番から）

森下は意気揚々とマウンドに登り、坦々とテンポよく投球練習をこなした。

『4番ファースト丹後君』

一球目はアウトにストレーターのサインが出て森下はゆっくりと振りかぶって投げる。

アウトハイの球に強振し打球は勢いよくバックネットに刺さり短い音を鳴らす。

（まあ、それ位はこれ位してくれないとね）

羽村は一球目と同じにインローに構えてミットを下に振って低めに投げる事を指示する。

森下は頷きプレートの端に足を乗せて投げた。

少し高めに浮いた球を強打された。

打球はサードの方に大きくワンバウンドして上がる。

田崎はその当たりに出るか待つか一瞬迷ってから前に出た。

その迷いの分彼の前に来た時には上がり際の難しい位置になっていて、グローブにも当たらずに後ろに転がりショートが捕球した。

田崎は首を傾げてグローブを叩きながら悔しそうに定位置に戻った。

森下は自信を持って投げたクロスファイヤーを強打されて少し燃えていた。

（当てられるとはな。次は変化球も混ぜよう）

次の中津は初球の内角へのスライダーを三塁方向にバントして田崎が慎重にプレーしてアウトを取った。

### 『6番ライト桐山君』

（案外早かったな、光と戦えるまで。皆には悪いけど俺が先にこいつの球打たせてもらうぜ）

桐山はよしっ、と気合を入れてサークルを出た。

一方森下の方は（この場面であいつか………ついてるな。アウトカウント一つ貰ったようなもんだ。ふっ、初試合で悪いがお前には今日には全打席凡退してもらうぜ）

自信も気合も十分に待ち受ける。

森下は一度キャッチャーのサインに首を二度振りセットに入る。セカンドランナーを一瞥してから投じた。

投じた球はカーブで真ん中低めから内側に入ってくる。ボール球を気にせず桐山は振り切った。

打球はピッチャーの右足元に勢い良く飛んでいくが、それを森下は難なくショートバウンドでセカンドに投げる体勢で補給しワンテンポ置いて投げた。

セカンドがギリギリで球を受けそのままに足が来てタッチアウト、瀬谷は直ぐに振り向いて投げたが、送球がそれで一塁はセーフだった。

「うおっ、あのピッチャーうまいな」

相手のベンチから思わず声が漏れる。

「でも他の奴がザルだな。セカンドももっと早く入ってやれよな。ピッチャー直ぐに投げらんなかったぞ」

「その前のサードもあれだしな」

「あいつヒットも打ってたな」

ここで、三國に人睨み入れられる。

「はははっ、じゃあどこの高校でも一人は良いのがいるって奴か？」

「まあ、そうは言ってもあの高校じゃな」

「俺らよりは賢いけど…」

「おい」

「あ、チェンジだ」

「おっし、行くか」

二人は競うように走って行った。

「あいつ等次の回もくっちゃべってやがったら代えるぞ」

監督の一人ごとを聞いたベンチ部員は次の回から声を張った。

三回の攻撃は先頭の間野は初球の高めのストレートを打ち上げ早々に打ち取られた。

トップに返って先ほど三球三振を喫した竹橋が打席に入る。まだ緊張しているのか何を思っているのかは分からないが、佐々木監督を振り見てボックスに入らない。そこで森下は監督の隣でぱっぱっ、とサインを出した。

「それ何のサインだったっけ？」

先生の質問に森下は呆れた顔で溜息をつく。

「後で絶対永谷さんに教えてもらって覚えておいて下さいよ。バントです。あの様子じゃ空ぶりそうですけど」

だが、竹村のバントは予想を外れて一塁線の際どい所に絶妙に転がり送球よりも早くベースを駆け抜けた。結果はファールを告げられたが竹村は全力疾走で少し落ち着いた。

落ち着いて竹村は何も考えない事にした。平たく言うと開き直ったのだ。

そして二球目、外角のストレートを三遊間に引っ張る。

ショートが左手を伸ばして上がり際の球をしっかりと見て捕りツーステップで投げた。

タイミングはアウトであったが送球がそれでセーフになった。

次の瀬谷は二球見送り、1ー1となり次の球を危なげなくバントを決めてツーアウト二塁の場面でバッティングも期待出来る森下に戻った。

『三番 ピッチャー 森下君』

俺でランナーを帰して2点差にする、という気構えで打席に入る。  
(ストレートを叩く、変化球なら腕だけで持っていこう)

横目で見るとキャッチャーは外角に構えていたが、初球は内角に来てキャッチャーは正面で捕球していた。  
(やっぱり構えた位置では分からないか)

三國は一回首を振ってから投げる。

内角へのストレートを森下は痛烈に引っ張る。

打球は一塁線上を飛んで行く。

森下はよしっ、と思い走るが『ファール』のコールが掛て相手ベンチからは安堵の息が味方からは賛美の声が出る。

この状況を一番喜ばしく思っていないのは、三國だ。

練習試合とはいえ誰がどう見ても格下の相手に先制点を取られ、あまつさえ追加点まで取られたとあっては監督や先輩に何を言われたものか分かったものではない。そして、自分のプライドにも関わってくる。

三國はマウンド上で息を吐いて気合を入れた。

そして、サインに二度首を振り一呼吸置いた三球目のサインに頷いた。



（二回首を振った？今までコースは構えた所だから、別の球か。少し間を置いた事もあって間違いないな。じゃあ何だ。練習試合なんだからいろいろと試したいだろうけど、投げなかったのは：腕に負担の掛かる球あるいは全力投球：だいいけど。変化球じゃなかったら素直に三振しよう）

考えが終わるか終わらないかの内にプレイが掛かり、ランナーに見向きもせず投げる。

ストレートより少し遅い位の球がインコースに来る。

その球はバッターの手前でストン、と落ちる。森下は引きつけて振り抜いた。打球は地面に強く打ちつけられてファースト後方を目指して飛んで行く。

一塁手の丹後が後ろを向いて走り、ジャンプして掴んだ。

三國とタイミングを合わせて投げる。そして、両者が同時にベースを駆け抜ける。

「ホーム！！」

キャッチャーの怒声に慌てて体を止めてホームに投げる。

羽村が腕を左に振るってその方に竹村は飛び、タッチを潜ってホームに触れた。

『セーフ！』

審判が両腕をを横に伸ばして告げる。

そして三越ベンチが沸いたが、『アウトー！』一塁審判がずっとコールしていたのをようやくと聞き入れて静かになった。



## 第五話…チャンス／ピンチ

「どうしたの、福地君？」

一塁コーチャーをしていた福地が戻って来てからずっと不服そうな顔で森下を眺めているのを見てマネージャーの永谷が聞いた。

「今のプレーで森下君がアウトになったけど…でもあれ、セーフだったんだよ」

福地が言うには、先に森下の方がベースを駆け抜けそれを相手の一塁審も分かっていたからコールが遅れてホームの様子を見てからアウトを告げたのだという。

「森下君は審判がアウトっていったらアウトだっていうんだけど何か納得出来なくて」

セーフ、アウトが味方に甘くなるのは仕方のない事なのかもしれない。

大人なら兎も角後数年間付き合うことになるチームメイトとなると甘くもなる。

永谷が口を挟もうと口を開こうという所で福地が溜め息を言った。

「って言ったら森下君ね。一点差の方が投げがいがあるので願ったりだ。零封してやる、だってさ。それでどこまで本気なのかな、と思って見ていたんだ」

永谷と福地は顔を見合わせて一笑する。

「永谷さん、ちょっと来てー」

永谷は軽く会釈すると監督によっていった。

「え、サイン？はい、分かりました」

再びグラウンドに目を向けるとボールをセンターに運ばれていた。

「ホントどこまで本気なんだろ」  
ばそつと誰に言うでもなく呟いた。

それから森下は3、4、5回に渡って得点圏にランナーを進められるものの打ち取るピッチングで決定打が出ず無失点に抑え、球数も少なく60球に達していない。対する三國は4、5回とそれぞれ一つずつ四球を出すものの2塁ベースを踏ませず、球数が80球を越える少し悪いペースながら1点差を保った。

「勝ってるのはいいけどなめてかかってきてくれた初回の一点だけ  
っていうのがねー」

円陣の端で佐々木監督が声を掛けた。

「はい、俺も賛成です」

森下がそれに乗ったのを見て主将が頷いて、

「じゃあ、この回一点取るぞー!!」

「おー!!」

皆の士気が高まった。

「でも何で一点何ですか？」

「え…ごめん」

「……すみません」

皆は苦笑いで空気を埋めた。

『6回の表 三番ピッチャー 森下君』

（兎に角塁に出よう）

「お願いします」

森下が構えて三國がモーションに入って（ファーストの位置が深い）投げる。

彼はうまい具合に内角に投げてくれた直球を一塁線にバントしてピッチャーが捕球するも一塁には投げずに舌打ちしてマウンドに上がった。

「今度はセーフになったぞ」

福地とハイタッチを交わして言った。

森下は少し広い位にリードを取ると、足に焦点を合わせて集中し始めた。

（キャッチャーの肩は普通だし、ピッチャーも多分クイックが得意じゃない。となったら）

ここで牽制をいれてきたが、頭から帰るとタッチするタイミングでもない程でボールを返すと直ぐに同じ幅でリードを取る。

そして、（投げる！）完璧なタイミングで駆けていき、一球目を外して投げてキャッチャーもいい所に投げたのがそれでもセーフになった。

ノーアウトでランナー二塁となり四番の羽村と追加点のお膳立ては十分である。

（あいつ、何でも出来るんだな。俺もバッティング位はしっかりとやって返してやるよ）

羽村は後ろ脚に重心を乗せて足をほとんど上げずに腕でタイミングを取るタイプのバッターでグリップを柔らかく握ってバットを揺ら

した。

（こいつを打ち取れたら後は簡単だからな。まずは内角にストレー  
トでいくか）

三國は頷いてランナーを気にしつつ投げる。

羽村はいつもはテイクバックを大きく取るのだが、この打席は小さ  
く後ろに引いただけでボールをコンパクトに打った。

打球はサードの伸ばしたグローブの下を抜けて行った。

レフトは定位置のやや後ろから回り込んで打球を抑える。

森下はボールが抜けてから走り出したのでタイミングは厳しい、ど  
うしようかとコーチャーの瀬谷を見るも何だか曖昧ではつきりしな  
い。

（タイミングはきつい：それにまだノーアウト）  
彼は三塁を2 m程超えた所で止まった。

レフトがホームに直接送球したので羽村は2塁まで進んだ。

『5番 センター 白岡君』

（僕の所に回ってきたのか。前の2人を考えたら予想も出来てたけ  
ど…。サインも出そうにないし打つしかないのか。兎に角打ち上げ  
ないようにはしよう）

チャンスの場面に白岡は少し臆してしまっている。

（このバッターは固くなってるな。スクイズあるかな。そういえば  
相手の監督はサインを出さないって誰かがベンチで言ってたな。ス  
クイズ：相手ピッチャーの調子がいいから追加点はやりたくない。  
さて、どうしたものか。三振か打ち上げてくれるのがベスト何だが

…)

キャッチャーの中津は三國が嫌がるのでマウンドに寄れず一人で色々なケースを考えた。

そして、内角攻めでいくことに決めて構えた。

三國がセットに入り、羽村が大きくリードを取る。三國はそれが少し気になったが、気を落ち着けてホームに投げた。

ストレートの真ん中に入ったがバッターは見送った。

（うわー見送っちゃった。次は振ろう。ストライクなら振ろう）  
そう考えていたのだが、内角に入るスライダーをまた見送ってしまった。

こうなると一度タイムでも掛けて切り替えるべきなのだが、それは白岡以外には掛け難い。それに浮足立っている時にタイム等頭に浮かんでこないのだ。

彼は高めのボール球で三振してしまった。

『6番 ファースト 相川君』

相川は打席に入る前に他の人はもう普段見たりしないが彼は律儀にも監督の方を見た。

だが、彼は思わず眼を丸めた。監督がサインを出したのだ。

佐々木は羽村は外野の位置を確認していたが、森下と相川が自分を見ているのが分かってせっかくだからと覚えたばかりのサインを使った。

この所の練習でちゃんとバントの練習も行っていたが相川はあまりうまくいっていなかった。ただ、そんな事は監督の知るところではなかった。

相川が打席に入り、ピッチャーがセットに入る。太ももが緊張して張っているのが自分でも分かった。頭の中で何度も『スクイズ』の言葉が繰り返される。

ピッチャーが前に足を踏み出す。

内野陣が慌てて動き始め、相川は内角低めの球をしっかりと見て当てる。

キャッチャーが打球処理に走りノーバウンドで取った。

バットに当たり後ろにふらふらと上がった球を捕球して直ぐにセカンドに投げセンターがボールを取ってベースを踏みダブルプレーを取られ、ボックスの近くで立ち尽くしていた相川の背を森下が押してベンチに戻った。

相手の監督はベンチ前で円陣を組ませて激励を掛けた。

投球練習の時に森下は一球一球丁寧に投げて今の状態を確かめた。

『6回の裏 3番 セカンド 宮山君』

（少し球が上ずってるな。足も重くなってきた。中学の時は7回までだったからこれで十分だったのに：思いつきり投げてたわけでもないのに：ブランクか、厳しいね）

彼はマウンドで上を見上げ周りの声に耳を傾け「よし！」と心内で叫び気合を入れた。

初球丁寧に外角低めいっぱいストレートを投げた。

（今：明らかにボールを見てきたな）

次の球一度首を振り真ん中から変化するスライダーを腕をたたんで



引っ張る。ショート定位置ややサードよりで待ち構え、後ろに転々と転がっていった。先に羽村がリードしていた位置で守備に就く前に地ならしはしていたが甘かった。

『4番 ファースト 丹後君』

丹後はバットを指3つ分程短く持つて構え、森下は牽制を一度入れた後クイックで投げる。

ボールは外角への直球だが、丹後は強引に引っ張った。打球は高く上がってファーストの相川が取って森下に渡したが、送球と走る速度が合わず速度を緩めてしまった分セーフになってしまった。

次の中津は始めからバントの構えを見せていて、それを素直にやってもらい一死二、三塁でバッターは旧友桐山を迎えた。

（またいい場面で回ってくるね。ふう、チャンスの後にピンチあり…格言だな。ここが今日の山場だ）

森下は二度首を振りセットから足をゆったりと上げて投げ、ボールは外角から真ん中からやや内角に曲がるスライダーを空振りして羽村がボールを下に落とした。

次は一回目で頷きマウンドで一息ついてから投げる。直球は高めに大きく外れていった。

（足の踏み込みが甘くなってきたな。球が上ずってきた）

足場を念いりに整えてまた一息ついた。

そして、セットに入り時間ぎりぎりまで球を持つて投げた。直球が膝元に決まったがボールになりまたもや羽村が弾いた。彼はピンチになった時には普段以上の力を乗せられるピッチャーでその球に羽村が対応しきれておらず、落球はこれで今日6回目であった。

次のベルト前の球をファールにして森下と桐山が目を合わせて2人して口元に笑みを作った。彼の頭にチームの勝利が浮かんだが、それよりも桐山を抑える方を考えた。

彼はワインドアップをした。彼のワインドアップは自分が尊敬している投手の物を似せていてこれをやるといつもモチベーションが上がるのだ。

それを見て桐山は違和感がなくなった。今日一日ずっと彼の球を見て本調子でない事が分かっていて残念に思っていた。だが、このピッチに来て一球毎にキレが良くなってきていた。

ワインドアップの後リフトアップを大きくとり、ゆったりとテイクバックに移り大きく踏み込み右腕を引きボールを押し出す。真ん中高めと危ない所だが、桐山は振り遅れてボールは高く上がった。当てるだけを意識してコンパクトに振ってやっとなった。

打球は思ったよりも伸びていきセカンドの瀬谷が追って行ったが、ライトに任せた。

少し浅いがサードランナーが捕球と同時に走った。

間野の肩は強くなく相川が中継に入った。

ボールが少しそれでタッチを交わされ相手の機動力もありセーフになった。

（あの打ち方であそこまで飛ぶのかよ。まったく、完封がなくなったじゃねえか）

森下も桐山も悔しそうな顔を浮かべた。

それからはこちらも安定したピッチングを続けて2塁までランナーが進むことがなく1ー1のまま試合は終わった。

## 第五話：チャンス／ピンチ（後書き）

打ち切りマンガ的な早さで進んだこの回ですが、思うことは多いで  
す。

僕はキャッチャーで一つレベルの違う人の球を受けてまともに取れ  
なかったことがあったり、5、6番の人の気持ちも分かります。

これから少し野球と離れた話しにする予定です。

では、この話からこんなあとがきになりますが付き合ってください。  
ちなみに（話し方で分かるかもですが）大阪の関西弁の強くない所  
を頭に描いて書いたりします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7379e/>

---

3カウント～辺りに轟け左腕（サウスポー）～

2010年12月18日03時38分発行